



箏曲

著●村山佳寿子

MURAYAMA Kazuko

点字楽譜の誕生

伝統音楽の近代化と盲学校における音楽教育

日本の伝統楽器である箏（そう／こと）。

近代以降は女性の稽古ごとのひとつとして人気を博したが、箏曲の演奏は、それまで盲人男性によって伝承されてきたものだった。

明治期、西洋の影響を受け、音楽教育や盲教育が進展した日本で、洋楽の点字楽譜を用いて新たに誕生した箏曲点字楽譜の形成過程について、近代の代表的な箏曲家・作曲家である宮城道雄の自筆点字楽譜など貴重な資料群をもとに、その歴史的背景とともに詳細に描き出した意欲的な一冊。



箏曲（そうきょく）とは、日本の伝統楽器である箏（そう・こと）を主奏楽器とする音楽およびその楽曲の総称であり、今日では小・中学校の「音楽」の授業でも扱われる、日本人にとって非常に馴染みのある音楽である。また、音楽の稽古事がピアノなどの洋楽器に取って代わられるまでは、当時、主として女性を中心に需要があり、茶道や華道と同様に、良妻賢母の象徴として、箏が人気を博した時代もあった。だが、当初、箏曲は、明治新政府によって「当道」と呼ばれる職能団体が解体されるまでは、琵琶、三弦、鍼灸、按摩などと共に、江戸幕府による保護のもと、男性の盲人（視覚障害者の当時の呼称）を中心に伝承が行われていた。

このようなことから、箏曲と盲人との関係が不可分であることは、日本音楽の研究分野においては周知の事実となっている。しかしながら、盲人が扱う点字楽譜は非常に特殊な資料であるために、箏曲の点字楽譜を真正面から論じた学術研究はこれまでなく、それを解読可能な研究者もいなかった。本書は、筆者が点字や点字楽譜の史料を用いて基礎研究から丹念に積み重ねた研究成果を刊行することで、箏曲点字楽譜の通説の見通しと、新たな研究手法の確立を目的とするものである。…著者「まえがき」より

A5判・上製・400ページ
定価6,000円+税（税込6,600円）
ISBN978-4-86617-310-8

電子書籍版も同時刊行!

詳細は弊社HP電子書籍の案内ページをご覧ください



注文カード

帖合・貴店名

〈八木書店経由〉

注文数

定価●六、六〇〇円(税込)
ISBN978-4-86617-310-8

箏曲点字楽譜の誕生
伝統音楽の近代化と盲学校における音楽教育

発行 六花出版 著 村山佳寿子

お名前

お電話番号

注文 年 月 日

●弊社注文制です。お近くの書店へご注文ください。
お急ぎの場合は小社に直接ご連絡ください。電話03(32963)8787

電子メール info@nikka-press.jp

箏曲点字楽譜の誕生

伝統音楽の近代化と盲学校における音楽教育 ● 目次

序章

- 第1節 問題の所在
- 第2節 先行研究の検討
- 第3節 研究の方法と史料
- 第4節 本書の構成
- 第5節 箏曲の点字記譜法の種類と箏曲点字楽譜の定義

第1部

学校教育制度における 点字楽譜の導入

第1章

点字楽譜成立前史と撫譜 ——盲人による記譜の試み

- 第1節 撫譜をめぐる現状
 - (1) 盲学校における触察用楽譜
 - (2) 「メーソン功績調査書」を扱った先行研究
 - (3) 蒲生郷昭による撫譜と『箏曲集』採譜への見解
 - (4) 撫譜に関する第三の言説
 - (5) 撫譜におけるハードウェアとソフトウェア
- 第2節 「モノ」(ハードウェア)としての撫譜
 - (1) 「メーソン功績調査書」にみる撫譜の記述
 - (2) 「ロンドン万国発明品博覧会」関連史料にみる撫譜の記述
- 第3節 撫譜の使用(ソフトウェア)の推移
 - (1) 山勢松韻と北村季晴による言説：洋楽に関する知識の必要性
 - (2) 今井慶松による言説①：箏曲を洋楽へ置換することの苦悩
 - (3) 今井慶松による言説②：撫譜の使用目的と使用状況の変化
 - (4) 奥山朝恭による言説：採譜可能な墨字利用者の出現①
 - (5) 村田松泉による言説：採譜可能な墨字利用者の出現②
- 第4節 盲教育の現場にみられる撫譜の存在

第2章

東京盲哑学校における音楽教育 ——近代学校教育と家元制度の出会い

- 第1節 盲教育における東京盲哑学校の位置
- 第2節 箏曲教授の試みと馬場みせ子：楽善会訓盲院時代
 - (1) 馬場みせ子による言説：江戸末期における女子の箏曲教習
 - (2) 萩岡松韻による言説：明治初期における盲人の箏曲教習
 - (3) 楽善会訓盲院における箏曲教授の試み：家元制度に基づく箏曲の学校教育への導入

第3節 教育体制の整備と洋楽の導入：

楽善会訓盲哑院～東京盲哑学校時代

- (1) 音楽取調掛員・山勢松韻の教員登用
- (2) 学科課程の編成
- (3) 洋楽の導入：洋琴科・ヴァイオリン科の新設とその廃止

第4節 洋楽導入期における点字楽譜の使用を巡る学内の 動向と生徒の卒業後の状況

- (1) 中村京太郎による言説：各学科での点字の積極的活用と山勢の反対
- (2) 音楽科生徒の卒業後の状況
 - [1] 佐藤国蔵／[2] 佐藤(吉見)力三／[3] 石井重次郎／[4] 天羽ひで
- (3) 佐藤兄弟が作成した箏曲点字楽譜の実態

第2部

箏曲点字記譜法の考案とその実践

第3章

東京盲学校における箏曲点字記譜法 の変遷——筑波大学附属視覚特別支援学 校資料室の所蔵史料を手がかりに

第1節 鈴木米次郎と『訓盲楽譜』

- (1) 教員練習科の新設と鈴木登用の
- (2) 一覧表「訓盲楽譜」の作成
- (3) 文部省(編)『訓盲楽譜』の編纂
- (4) 点字版『訓盲楽譜』の存在

第2節 東京盲学校における箏曲点字記譜法の考案と その変遷

- (1) 町田校長による箏曲点字記譜法考案の企図
- (2) 箏曲点字記譜法の変化の検証
 - [1] 対象史料の書誌情報／[2] 諸史料の関係／[3] 記譜法の変化の様相

第3節 箏曲点字楽譜「宮城道雄作曲集」における記譜の特徴

- (1) 書誌情報
- (2) 記譜の特徴
 - [1] 楽譜の体裁と音高関係(調子)／[2] 手法における記譜の注解
- (3) 宮城道雄との関連性：生田流箏曲の教習の開始

第4章

大阪市立盲学校における箏曲点字楽譜 解説書『点字箏譜解説』(1925)の成立

第1節 大阪市立盲学校における音楽教育の特徴

第2節 『点字箏譜解説』の概要

- (1) 書誌
- (2) 内容

第3節 『点字箏譜解説』における記譜法の特徴

著者紹介

村山佳寿子(むらやま・かずこ)

2016年お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻音楽表現学コース修了。
日本学術振興会特別研究員-DC2を経て、2024年お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻表象芸術論領域修了。博士(人文科学)。
現在、お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェロー。日本の伝統芸能(生田流箏曲・地歌三味線)の担い手として、演奏活動や後進の指導も行う。筑波大学附属視覚特別支援学校では、小学部の課外活動で箏を指導している。

- (1) 『点字箏譜解説』にみられる諸記号
- (2) 東京盲学校における記譜法との比較・考察

第4節 『点字箏譜解説』の成立

- (1) 川端米逸の東京出張
- (2) 帰阪後の川端米逸の評価

第5章

宮城道雄の自筆点字楽譜にみられる 記譜の特徴

第1節 点字楽譜利用者としての宮城道雄

第2節 宮城道雄の自筆点字楽譜の全体像

- (1) 宮城道雄の自筆点字楽譜の概要
- (2) 分析にあたって
- (3) 自筆点字楽譜の現存状況
- (4) 記譜の特徴
 - [1] 楽譜の構成／[2] 楽曲の記譜／[3] 筆記具／[4] 墨字による書き込み

第3節 宮城道雄の自筆点字楽譜「秋の調」の考察： 墨字楽譜との比較を通して

- (1) 《秋の調》について
- (2) 資料と方法
- (3) 分析結果
- (4) 記譜の年代推定

終章

第1節 結論

第2節 今後の展望

巻末資料

- 1. 宮城道雄の自筆点字楽譜一覧表
- 2. 一般財団法人宮城道雄記念館資料室所蔵 自筆点字楽譜「秋の調」翻刻

助成：公益財団法人 ロームミュージックファンデーション

